



家日記下巻

重くお部

かゝる元祿しき此春伊勢此國  
より武にのりし 権きんとして

留別 二句

まき

片の如のおりうしきは何なる

しらのくまはりに

まきおや梅のつらきも一色



鶴子

入道しきも花もりたるも塔の飯 団子  
 三つや之鹿もさく見れぬも 斗從  
 川廻りかゝる能くぬ柳の 葉  
 心をまじかゝるぬ 加枝  
 又も~~~~~ 乙由

奈名

五句

古き草

鳥

冬あんなちりり雪のうらみ

切らばあや

後のやうにみゆして

雪のうらみ 白く雪のうらみ 春事一寸

ゆかききよきわしきしゆき  
ゆかきのうらみ~~~~~

花も一花をちとちりさへお  
花を叫ぶ花はくさくさをすん

け二のちも花のやうにさへ

腰ぬきさるる

又さへもけりけりさへ

さへりけりけりさへ

二女よよけりけりさへ

途中吟 五句

また

あはれをあらけりさへ

花よさへりけりさへ

小舟りけりさへ  
かのちり川を

又はりさへ

日晴てら花をちとちりさへ

あはれりさへ  
みのりさへ

三十一  
くし上りけりさへ

おれねをきりりち

聖方所解々々

そのれ肝つし〜

武に

三月四日武に丹い〜

鶏り形〜 其角

は〜欠て此口〜

〜の凡体あり

様〜 其角

〜をい〜

そのれ〜

其一

白流〜 其角

十二のちつ夏のあつたをうらやまして世傳を  
いさろして片川の長湊寺にすして侍ら  
せとつ夏の生むらかたのこころをいしきや  
堂の南れにみ菊の一簞の掬をとつてして  
け様をみる様をいさるまゝと

世の中をさうに 京祇乃やうりばい 菊

け短冊を風嫁に埋めりやうりけあつ  
白はらきけ 唐乃一せれすめちうと一を  
秋風のわ

強りよされ

かの塚のあま青華をとら人海さ木の花を  
折たちみかさしをさそつてあつていし界やうも  
あまを命をさしにちりやうよとぬりなりなり  
居てわねそつたをぬるをさつたかれらうと

えきお人の伝も伝らう

ちしは夏は川をさつてあつていし界やうも  
伝らう人あつて

ふのさの伝らうや 菊乃家

かゝるはあ

かゝるちりて

まふ堂をいし

十日三冊

蓮池にさふふ又さふふをありんこのゆを竜  
山の雲をぬき春はふかしの國のあきつな  
しはておぼろのきりあれたんらうはま  
あまの池のたにやうらん

たふさふ  
たふさふ

いさふふのふつはくが朝子あふたふふ

あふふあふふのふふあふふあふふあふふ

あふふあふふのふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふ

かくれあふふあふふのあふふあふふあふふ  
は空を十のうあふふあふふあふふ  
はくあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふ







してあらうかきまゝのさういひをきか  
る候様もさうせんかきこゝ人し  
をよき親をお尋ねられゆくを  
白鴉と語り隣の家れまゝおあふ  
を人の一輪いよこゝれ二ふ虧也  
ゆい鹿をうらむおぢおぢおぢを  
まゝとて人まゝまゝのまゝのまゝ  
てまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
みりしまゝのまゝのまゝのまゝ  
月もまゝのまゝのまゝのまゝ  
なりまゝのまゝのまゝのまゝ

貞享五年 戊辰 三月 仲旬

牧足書

おろりにんをいさなれ月

十四日武にを  
信ららるる  
筋ふ

うみをまはりて舟をこらふ

飯我

あまのこをまはりて舟をこらふ

七川

あまのこをまはりて舟をこらふ

柳枝

馬田

十八日馬田の野をりて如舟をこらふ  
やまのこをまはりて舟をこらふ  
の字をまはりて舟をこらふ  
あまのこをまはりて舟をこらふ

額

八月月夜に舟をこらふ  
あまのこをまはりて舟をこらふ

くさげ

あまのこをまはりて舟をこらふ

あまのこをまはりて舟をこらふ

舟ノ護

あまのこをまはりて舟をこらふ



巻一

十一

さきまのけいさつあひなごのあはれ  
批

芳沢亭

さあかあまをけいさつあひなごのあはれ  
あ

ねりし

風まきまじ  
あまきりし

本枯よ虫のあまきりし  
あ

あまきりし  
あ

尾張

今月廿七日尾張のあまきりし  
二十九日らねあまきりし  
あこれのくまきりし  
あ

三月廿二日

あま

あまきりし  
あまきりし  
あまきりし

新編

廿七

卯月のねをてよの  
あつりてものねよ  
ねえね

節子

國くればあをくれば文のそく  
きねきんさくをあつちあつち  
さうさうやあかのねよまき  
さくさくさくさく

はゆふのねやあかたね

たひ

さうさうさうさうさうさう

高川

ふれ子やういふのね

妻後

はらのせをさうさうさう  
あかあかあかあかあか

うに橋をねさうさう

木之

希世

いねらまきつたさか  
のりかえらる母堂をうりてん

後

廿七

そのれと二月もありく春いさうり  
きよしきまのしそ

お境 二句

まき

あゝをりさけうらこりにけはなうな

く澄て初の花まるし 菊井田

雪のわしをさきり

くさくさ

あやめ

そらや松木からあてはかきし

まき

言れ清ぬと白もくさり

雲鶴

よと力とあをくさなを觸る

夕可

く風名楠乃とこのま

均水

青葙のよとめたしぬち乃月

自如

子をのつらむハ

筆

各一頃

後下

十文

花交 三句

山寺

去天

らるの夢あがきしーしをりと椿う南

田家

急つーついーくささるおおま

別野

ゆらやーあまーい母を日下

測原

いそん〜とつあををたをたか  
か〜中まを何舟り往まは  
つ〜かり植原不あ〜しり  
界あ〜一楓〜るりか  
か〜ら家まをとP作〜  
りすちまやせん

可吟き下

後下

十文





續

七

風もよのおんゆら風も昔より

懐り仲るの丁也田人

又方 五句 碧川 四句

可也 五句 拍美 四句

山石

耕作れす川もあやなふ根 去

いぢよらま四月十日の紀らら  
二亦まか一ぢんいんら  
さうくた世を田舎のうれく  
明り三徑のうれく  
やのひみんを

岐阜

遇雨

くねくねたまらねるやらの 全











尾川

連中

流しした中おさかろや青

紀行十六所

源伯 九十日

雲水追善

悼芭蕉之句

尾川 塾田

連中

このみちる月の中は二の志はしめやし次は分れ  
あしはらりぬはらもかくせしそやん  
うわららし思ひこやー芭蕉翁十  
いぬかあやりのもさぬんかそるはー此は  
ーめーけ茶屋茶二あみありーこーけ海  
舟多も轡を控ん心豆付角とらまをさめあ  
流るる一まのちうまこ桐をさうりたる  
江原をありー流るるけんろあ  
やちたのしづれ本枝の梅あそそそ

後下

連中



後集

四

しらぬはくしほのさかき  
くはのまをぬくしほの  
く野のあひのらむしほの  
鳥はよ勝をたしほの  
ゆしほのさかきしほの  
そのまのしほのさかき  
の母白のさかきしほの  
しらぬはくしほのさかき  
しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

しらぬはくしほのさかき

しらぬはく

後集

四

後集

後集

何れも枯るる可やありし 梨葉

月をくくちき人田より秋は 水閣

ちきくちきあやと秋の 十小

秋はゆり秋の風とす

秋同を文とぬらひ

秋借 十小

ちきくちき

塚らち助けふ家信のいさる風 東藤

### 悼松名筑蘭

金羊を存せしとあつてきふゆふのち  
とのちや文書備なうきふけりてち  
れいされしとて松名筑蘭をいさる  
ててをを勝れしとて松名をいさる  
く風雅を勝れしとて松名をいさる  
らとららららららららららららら  
りやこのことちや官をいさるしとて  
れ之の跡をいさるしとて松名をい  
をいさるしとて松名をいさるしと  
世にめらるる松名をいさるしと





雑記

この世の事は人の心次第なり  
ちりちり信じておこなふ事  
はるかにいふ事ある事  
うかりていふ事ある事  
まゝしていふ事ある事

まじく

まじく

この二月の三日の時

一月一日の三日の夜にこの世の下

酒堂

むらさきの所あるやまのま

園を

昔の事ありては家のま

ま

ま

雑記

雑記



後

後

おのころのさきさきのさきさきのさきさき

あつたつたつたつたつたつたつたつた

獨帳

ぬいしぬいしぬいしぬいしぬいしぬいし

かろのやを所の時にも果強、を

二五

原風やあつたつたつたつたつたつたつた

涼——つたつたつたつたつたつたつた

憶出跡

くろあつたつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつた

はさるのさきさきのさきさきのさきさき  
一箇の風流つたつたつたつたつたつた







よきよのいふふか籬も秋の月  
均の  
目み入るうたのいふさきなり錦のた  
二木

文

強き方の一なる方これ叶くぬの南  
際川  
叶くぬとて思せりまふつくくあふ  
自如  
叶くぬとて思せりまふつくくあふ  
孫

いんちんちんちん  
いんちんちんちん

卯さや破<sup>レ</sup>龍の<sup>レ</sup>鼓と<sup>レ</sup>鼓のつん  
ま  
手<sup>レ</sup>撼も<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>朝  
二木  
<sup>サキ</sup>割<sup>レ</sup>感し<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>に  
櫻人  
ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>お  
て  
破<sup>レ</sup>像<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>い  
破石

山中

あはれも<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>時  
菫

舟 廻るゝや 越ねるゝりの 舟 松舟  
 燭 燭の 光の てるゝゝゝゝゝ  
 燦 燦々々々 牛の 走るゝゝゝ  
 金 金屏の 木の ぬるゝゝゝ  
 心 心も 七みゝゝゝゝゝ

兼好法師の 草子  
 舟 廻るゝや 越ねるゝりの 舟 松舟  
 燭 燭の 光の てるゝゝゝゝゝ

舟 廻るゝや 越ねるゝりの 舟 松舟  
 燭 燭の 光の てるゝゝゝゝゝ  
 燦 燦々々々 牛の 走るゝゝゝ  
 金 金屏の 木の ぬるゝゝゝ  
 心 心も 七みゝゝゝゝゝ

連宗四十六人

日記餘頁

卜居篇

世の果はをらるるものなりとて  
つらにこの世に身をまかせた  
あまのついでに身をまかせた  
るゝしをまかせた  
たれとてのをまかせた  
わが身は世のついでに身をまかせた  
とてまかせた  
まかせた  
まかせた

後

前

後

前

きしんをよみあしうひしすしんを  
そしうしんをよみあしうひしすしんを  
ありておみきやれりしんをよみあし  
林をよみあしうひしすしんを  
このたしんをよみあしうひしすしんを  
しんをよみあしうひしすしんを

支考

きんりのけりあし  
卯月お

新玉二階り窓やうらむ  
笑

二階りうらむ窓の賑きうらむ  
乙由

うらむ窓の賑きうらむ窓の月  
かき枝

うらむ窓の賑きうらむ窓の月  
一尾

うらむ窓の賑きうらむ窓の月  
お舟

しんをよみあしうひしすしんを  
ありておみきやれりしんをよみあし  
林をよみあしうひしすしんを  
このたしんをよみあしうひしすしんを  
しんをよみあしうひしすしんを

うらむ窓の賑きうらむ窓の月  
お舟

うらむ窓の賑きうらむ窓の月  
お舟

文西 瓦張

しるすお本のしるす  
除きのしるす  
桐花のしるす  
ありししるす  
まふのふしるす  
素ふししるす  
らんしるす

物喜みれあししるす  
朝ふに推ししるす  
三日月や十五のたのむ  
文月のしるす

七月

後下

シタ  
M. 6. 1. 2.

きんしんふん 穂ふんふんふんふんふんふん  
高のふんふんふんふんふんふんふんふん

ふ

根のふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
穂ふんふんふんふんふんふんふんふん  
あふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふんふん

ふん  
ふん

根えやふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふん  
銀何ふんふんふんふんふんふんふん

乙申  
支考  
国交  
銀何

田舎のふん  
ふん

月かふんふんふんふんふんふんふん

ふ

常世帯此  
ついでにけり

たのしみかめ腰つやまふり

園

まほれおもしろきをせんりつがけり  
かりのけりせんりつがけり  
つやまふり二つをせんりつがけり  
鶴のつやまふりせんりつがけり  
つやまふりせんりつがけり  
つやまふりせんりつがけり  
つやまふりせんりつがけり

たのしみかめ腰つやまふり

園

え縁て夏の秋の月

十五の日の朝

あけおめ

校正

京師三條上戸  
井筒屋



